「知る重み～出生前診断　家族の葛藤～」を見て

出生前診断については、当 HP でもしばしば触れてきたが、最近では４月からは妊婦の採血だけでダウン症など３つの染色体異常が高精度でわかる「新型の出生前診断」が始まったが、そのことについては「生命現象の問題で、日本はどこに向かおうとしているか（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅶ）、2012.09.24.：参照 ）を掲載した。

昨夜、出生前診断を専門とするあるクリニックを受診した家族の葛藤を取り上げたドキュメンタリー番組「知る重み～出生前診断　家族の葛藤～」を見たが、このクリニックを受診する胎児の１割に異常が見つかり、その８割が中絶を決意しているという。
お腹の赤ちゃんに異常があると分かりながらも、産むことを決意した家族の葛藤も追跡取材していた。

医学の進歩、検査技術の進歩による精度の高い診断で、かつて生まれるまで分からなかった胎児の異常が出生前診断で分かるようになってきたが、恐らく医師側からすれば、より精度の高い精密検査があると分かると、それらの検査機器、検査環境の整っている大きな病院をまず紹介するだろうし、当人や家族の側からそれだけ葛藤期間が長く、深刻になるという問題が生じる。

生命誕生は自然の摂理によるものであり、妊婦や胎児に責任ある問題ではなく、医師は診断結果を伝えるだけで、産む、産まないの判断は妊婦（家族）に委ねられるだけに、その間の悩み、葛藤はいかばかりかと思う。
特に、出生前診断の問題は、当人が当人の病気をどう受容するかということ以上にもう一つの生命の有無に関することだけに、葛藤は想像以上であろう。

番組では産むことを選択した母親は、「早く分かったことで、家族として受け入れる心の準備ができたので良かった」と話していたが…。

出生前診断に関わらず他のガン等の病気でも、これから益々医学の進歩、検査技術の進歩による精度の高い診断ができるようになるのだろうが、それら精密検査を受け診断が出るまでには時間が更に要ることであり、その期間の中で診断結果をどう受容するかは、感情ある当事者（家族）だけに、当事者にとってはしんどい営みともいえる。

医学の進歩によって“知る”ことの重みを、我々一人一人に問いかけてくる番組であった。

阿部幸泰　　（2013 年 9 月 18 日　記）